

令和元年度 第6回

第三者評価検証委員会会議記録

確認欄	教育長	教育次長	係長	係

日時	令和元年12月10日(火) 11時00分～16時00分		作成者 事務局 総務教育係 小林義尚
場所	野尻湖ナウマンゾウ博物館 一茶記念館 信濃町役場 公室	配付資料	会議次第、信濃小中学校プロジェクト中間答申、学校づくりを考える日資料、日課案、前回会議録
出席者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 齋藤委員長、近藤副委員長、加藤委員、藤倉委員</li> <li>・ 佐藤教育長、勝野校長、松木教育次長、小林総務教育係長</li> </ul>		
欠席者	なし		
内容	検討内容	検討結果	
協議事項	<p>1. 開会</p> <p>2. 町文化施設視察 (1) 野尻湖ナウマンゾウ博物館</p>	<p>事務局：松木教育次長</p> <p>野尻湖ナウマンゾウ博物館：近藤館長</p> <p>◆館内の説明</p> <p>①町内の児童生徒はどのくらい来ているのか。【委員】 ⇒学校の授業で1度は来ているが、それ以外で親が連れてくることはほとんどない。【館長】</p> <p>②発掘体験を学校の授業としてできないのか。【委員】 ⇒発掘は、野尻湖の水位を下げる3月の春休み中なのでできない。【館長】</p> <p>③社会に出て夢がないと立ち向かっていけないので子どもたちに夢を持つことの大切さのメッセージを伝える施設である。【委員】</p> <p>④柔軟なプロジェクト型の授業ができれば良いのではないかと。例えば1・2年生は生活科で高学年は総合学習の時間を使ったらどうか。【委員】 ⇒川と地層の学習を飯綱町と信濃町で実施した。信濃小中学校は授業日課の都合で1日の体験学習ができず午前中で帰ってもったいない。【館長】</p> <p>⑤気候変動による災害が増えている中で災害学習も重要ではないか。危険を危険として体験できるような学習もこれからは必要になる。【館長】</p> <p>⑥博物館と芸術を結びつける取り組みを1階エントランスの壁画で見ることができた。教科を超えた総合的な教育になる。【委員】</p> <p>⑦考える基は感性であり、その感性を養うには体験が最も大切である。この体験によって成功も失敗も経験していくことができる。【委員】</p> <p>⑧学校は、租税教育やガン教育などこれまで以上に教えることが増えていて学校だけでは難しい。【教育長】</p>	

(2) 一茶記念館

一茶記念館：松木係長、渡辺学芸員

◆館内の説明

- ①一茶記念館と学校との系統性や継続性はどのようにしているのか。【委員】  
⇒学校との系統性と継続性に課題がある。一茶記念館で毎年アプローチして作っている。【記念館】
- ②地域学習は地域が主役で良いと考える。先生が変わっても地域学習を継続できる人が学校の中において調整する仕組み作りが重要。【委員】

3. 協議

(1) ふるさと学習  
と地域連携に  
ついて

学校：勝野副校長

◆信濃小中学校プロジェクト中間答申、学校づくりを考える日資料により説明

- ①一般的な総合的学習であれば、教員がこれまでの経験を活かした学習に取り組めるが、ふるさと学習では異動で来たばかりの教員は信濃町のリソースを理解していないので負担が大きいと意見が出ている。【校長】  
⇒学校の先生が楽しいと思えることが大切。先生の特性を活かした楽しい学習ができれば学校が好きになってふるさと也大好きになる。【委員】
- ②ふるさと学習の成果は、学びに向かう人間性をふるさと学習で育める。課題は、信濃町のリソースが多すぎて全て学ぶには時間がない。総合の時間だけでなく図工や理科など横断的に取り組んでいる。【校長】
- ③一茶記念館は、俳句を2年生と7年生に教えてもらっている。ナウマンゾウ博物館は、理科や環境教育の授業で協力いただいている。
- ④これまでの実践を「足跡カード」として集約、整理して次年度の参考となるよう工夫している。【校長】
- ⑤地域連携のコーディネーターが不在なので、しなの学校応援団名簿を引き継いで活動をしているがいずれ限界がくる。【校長】
- ⑥信濃町に絞り込んだ学習で良いのかとの問いがある。平和学習やスポーツを総合の時間でやりたい教員もいる。【校長】  
⇒ローカルを学んでグローバルを考えさせる教育もあるのではないか。一茶記念館の俳句大会は全国レベルであり、ナウマンゾウ博物館は世界レベルである。グローバルへ発信する教育はできる。【委員】
- ⑦各学年での重点目標（願う姿）は、共通理解が図られているか。【委員】  
⇒全教員での共通理解は図られていないが、学年単位では考えている。【校長】

(2) 学校日課につ  
いて

事務局：小林総務教育係長

◆日課変更案の説明

- ①初等部と高等部を共通で1時間50分とする。
- ②初等部は、45分から50分の5分間を進化の時間として担任裁量とする。
- ③朝の学活と読書活動の時間を確保するため開始時間を8時10分とする。
- ④冬日課のバス出発までの時間を校内に放課後塾を開設を検討する。
- ①2時間目終わりの初等部活動の10分に対する抵抗感が大きい。再度初等部活動の在り方について校内検討してみよう。【校長】

	<p>(3) その他について</p>	<p>⇒日課について本案をまずは一度試してみたらどうか。【委員】</p> <p>①学力の遅れを指導するだけでなく、行動面での問題も一体的に捉えた支援がこれからの学校運営には求められる。信濃小中学校のリソースルームやアシストルームでの小集団や個別支援の在り方について再検討する際は、協力する【委員】</p> <p>②人間関係が固定化しやすい一貫教育の中で外からの刺激が大切になってくる。【委員】</p> <p>③学年単位での学習形態にこだわらず能力別や縦割り活動も大事になるのではないか。【校長】</p> <p>⇒能力別でクラスを別けると子ども同士の評価が固定化してしまい、不登校傾向が増えるなど良い結果とならなかった。縦割りは放課後の活動で行うことが望ましい。【委員】</p> <p>④一貫教育では、教職員間の情報共有と意識の共有が大切である。【委員】</p>
<p>4. 閉会</p>	<p>事務局：松木教育次長</p>	
<p>次回内容予定</p>	<p>・学校改善の提案書を事務局で作成し内容確認を行う</p>	
<p>次回会議日時</p>	<p>令和元年2月25日(火) 午前10時30分～</p>	